

## 南アルプス（中央構造線エリア）ジオパーク 再認定現地審査報告書（公開版）

## [日程]

10月31日（月）～11月1日（火）

## [現地審査員]

- 成田 賢（日本ジオパーク委員会委員）
- 杉本伸一（日本ジオパーク委員会現地審査員）
- 蓮岡 真（日本ジオパーク委員会現地審査員）

## [主な参加者]（所属・職名）

## ○協議会

- ・白鳥 孝（南アルプスジオパーク協議会会長 伊那市市長）
- ・柳島 貞康（南アルプスジオパーク協議会会員 大鹿村村長）

## ○事務局関係者

- ・田中 章（南アルプスジオパーク協議会事務局長（推進室長））
- ・下平 明彦（推進室副参事）
- ・北原 孝浩（係長）
- ・小林 竜太（主査）
- ・藤井 利衣子（専門員）
- ・上原万智子（富士見町 産業課商工観光係長）
- ・竹前 雅夫（飯田市協働環境部長）
- ・池戸 通徳（飯田市環境課長）
- ・松澤 真（飯田市環境課 環境保全係長）
- ・村松 陽介（飯田市環境課 環境保全主査）

## ○教育関係者

- ・小澤 亮（国立信州高遠青少年自然の家 事業推進室推進室長）
- ・北村 尚幸（大鹿村教育委員会 事務局長）
- ・杉山 敦（長野県高遠高校教諭）

## ○関連文化施設等関係者

- ・河本 和朗（大鹿村中央構造線博物館 学芸員）
- ・宮崎 裕子（大鹿村中央構造線博物館 学芸員補）
- ・坂本 正夫（飯田市美術博物館専門研究員（地質担当））
- ・三石 和子（ハイランドしらびそ副支配人）
- ・宮下 彩葉（南アルプス長谷ビジターセンター 地元出身大学生）

○観光関係者

- ・山崎 裕久（飯田市観光課 遠山郷観光振興係）
- ・近藤 力夫（遠山郷観光協会 会長）
- ・伊藤 佐登子（伊那市観光協会）
- ・山崎 徳蔵（遠山郷温泉郷 かぐらの湯支配人（南信濃振興公社事務局長））

○現地案内及びジオガイド関係者

ジオパーク認定ガイド会

- ・小松 千里（会長）
- ・平林 啓作（副会長）
- ・森川 裕司（総務副部長）
- ・北條 久美子（会計）
- ・伊東 基博（ジオパークガイド会・板山地区住民）
- ・胡桃沢 三郎（下栗案内人の会）
- ・熊谷 栄三郎（飯田市中郷前区長（前上村まちづくり会長））
- ・板山地区住民の皆さん（6名）

**[審査日程概要]**

〈一日目〉

- ・事務局ヒアリング（国立信州高遠青少年自然の家）
- ・教育ヒアリング（国立信州高遠青少年自然の家）
- ・板山露頭視察（ジオサイト）
- ・昼食（道の駅南アルプスむら 雑穀料理レストラン「野のもの」）
- ・伊那市長谷ビジターセンター（関連文化施設）
- ・中央構造線博物館視察（関連文化施設）
- ・ジオパークガイドヒアリング（中央構造線博物館）
- ・事務局及び構成市町村担当者との懇談会（大鹿村山塩館）
- ・首長ヒアリング（大鹿村山塩館）
- ・交流会（大鹿村山塩館）

〈二日目〉

- ・車中移動解説
- ・しらびそ峠（ジオサイト）
- ・ハイランドしらびそ（ジオパーク・クレーター展示）視察（関連施設）
- ・下栗の里視察（ジオサイト）
- ・昼食（下栗の里 高原ロッジ下栗）
- ・中郷流宮岩視察（ジオサイト）
- ・観光ヒアリング（遠山温泉郷 かぐらの湯）
- ・講評（遠山温泉郷 かぐらの湯）

## 現地審査のまとめ

### (1) ジオサイトと保全

しらびそ峠、しらびそ平へ続く林道では、木々の間から中央アルプスから次に長野―静岡県境に聳える雄大な南アルプスの景観が望まれ、道路沿いには観察できる露頭が沢山ある。それらの露頭には解説版を設置し、訪問者がハイキングをしながら山の成り立ちを学べる素晴らしいエリアとなっている。板山露頭では、板山集落の地域住民が露頭の保全活動並びに断層谷を一望できる展望台や展望台に至る歩道などの周辺環境整備活動に取り組む活動が集落の団結につながり、中郷流宮岩の素晴らしさに気づいた地域の人が協力して保全にも取り組む活動など見ることができた。

今後は、ジオサイトの解説板に一部分かりにくい部分やレイアウトの統一性に欠けるところが見られたので改善し、地元の住民でも簡単に紹介できるようにしてほしい。保全活動により、露頭は見やすく展望台へ向かう歩道も安全に確保されているが、露頭表面の切取は逆に風化を促進させ落石の恐れなどがあるので対策をとってほしい。

### (2) 教育・研究活動

青少年自然の家では、ジオパーク展示に大きなスペースを割いており、訪問者にジオパークを広く普及する活動をし、ジオパークとの一体教育を進めており、青少年自然の家の事業プログラムとジオパークが連携している状況が把握できた。また、県立高遠高校でのジオガイド研修へ参加するカリキュラム導入など小学生から高校生までの教育活動が実践されている。また、これらの教育的活動には、エリア内にあるジオサイト関連文化施設の常駐する地質専門の学芸員の存在も大きいことが分かった。

大鹿村中央構造線博物館では、博物館建物のほぼ真下をとおっている「中央構造線」という大断層と、大鹿村の岩石標本の展示を中心に、地震と地殻変動、地盤・土砂災害と地形のでき方などを知ることができ、大鹿村を通る中央構造線とその周辺に分布する地質が標本とともにわかりやすく展示されている。また、飯田市美術博物館を中心に地質専門の学芸員のもと、地質学的側面からの現在の学説を踏まえた非常に高度な解説がされている。しかもその解説が、林道沿いの簡単な解説版からされており、さらに興味を持った訪問者（登山者も含む）が、拠点展示コーナーさらには博物館へと誘導するパンフレットも整備されていた。年々着実にその活動の進展が伺われた。今後は、ジオパークに関する展示と合わせてジオパークネットワーク活動の紹介などの展示も充実させてほしい。

### (3) 管理組織・運営体制

南アルプスジオパークの運営体制の見直しについては、平成24年から4市町村（飯田市、伊那市、富士見町、大鹿村）の関係機関や団体からなる南アルプス（中央構造線エリア）ジオパーク協議会を組織し、その現在の事務局は、伊那市に設置した専門の推進室を置き、そこに専門員を配属して体制が強化されていた。また、4つの専門部会（観光部会、教育部会、学術部会、地域部会）を設け、各自自治体で部会を担当する形を取り、事務局や部会の会議も定期的に関催され、各会議の内容は、メーリングリストにて事務局・各部会構成者に配信され、情報は共有

されている。ただ予算について、特に各自治体が担当している事業予算は、その自治体が負担する形となっており、ジオパーク全体での予算プールはなされていないことが気になるところである。

このように、事務局を置く伊那市を中心とした事務局活動に対し、その他の市町村が大変協力的に対応している様子が伺えた。そのため、アクションプランの進捗状況について前回の再認定審査結果で指摘された11項目の指摘事項を整理し、指摘事項毎にその対応を計画したアクションプランを基に、ほとんどのアクションプランは実行されたが、しかしながら基本計画は、具体性に乏しい状況であることから、教育部会を中心に進めた自然体験教育活動についての情報やノウハウのジオパーク全体での共有にはまだ取り組むべき課題がある。また、ジオパークからの発信や広域的なネットワークづくりについても山岳ガイドとの交流は進展したものの山梨県との連携がまだ進んでおらず、満足な状況にはなっていない。

#### **(4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム**

博物館やビジターセンターには若いスタッフたちやガイド研修生の増加があり、それを支える関連文化施設の充実につながっている。また、ジオサイト近くの喫茶店では手作りのクッキー（流宮岩を模してある）を食べることができるようになっており、道の駅では、地元で生産されたものを使用した国産の雑穀と伊那雑穀カレーも販売され、ここでしか食べられない南アルプスの大地の恵みを楽しむことができる場所が各地にできてきている。地域の人々がどんどん積極的にジオパーク活動に取り組んでいる姿が伺えた。

ジオパークガイドについては、平成23年からガイド養成講座が開始され、平成26年に有志によってジオパークガイドの会を発足している。2市1町1村で構成されたこのガイドの会は、現在認定ガイド39名で活動している。この会では、訪問者へガイドを行う他に、看板の整備や歩道の整備なども行っている。また、他のジオパークにあるガイドの会とも交流を行っており、ガイド間のネットワークも図られている。また、ガイドの会では、高校生が認定ガイドとなっているのも大きな特徴である。今後は、計画的にガイド組織の運営を進め、各構成市町村エリアだけの説明活動に留めるのではなく、エリアを越えた南アルプス全体のジオストーリーを表現できるジオガイドの育成にも努めてほしい。そのためにも、各観光協会が独自で企画実施しているジオパークの冠のついた企画やジオツアー、観光イベントと双方で積極的な共同参画の動きをさらにとってほしい。

#### **(5) 国際対応**

英語が併記された解説板など一部で外国語対応がされている。今後、さらに野外解説板、パンフレットなどにおいて外国語対応が望まれる。

#### **(6) 防災・安全**

地震火山こどもサマースクールを2015年に開催し、大断層を知る上で重要な露頭や地殻変動について専門家による学びと実験を通じて防災意識を高める活動や地震観測点に隣接する中学校で地震に関する授業を行うなどジオパーク活動として進められている。大鹿村中央構造線博

物館博では、県内外の地区の防災担当者からの地震に関する問い合わせに対応している。また、ガイド養成講座のカリキュラムには、ガイドのリスク管理が盛り込まれ、特に山岳観光における林道バスや登山ガイドにおける安全体制については、山岳遭難防止協会や山岳救助隊員と連携を持ちながら安全確保に努めている。下栗の里を眺める展望台やそこまでの歩道は、山の急な傾斜地にあり、住民やガイドの手で整備し歩道以外立ち入りを規制することで周辺の森林環境保全だけでなく安全管理活動にもつながっている。

## （7）最終的評価

前回の再認定審査の際にいくつかの課題が出されているが、課題については事務局やジオガイド、観光協会などからの説明および現地視察から着実に改善がされており、さらに成果を上げていることを確認することができ、ジオパーク活動として着実に進められている様子が伺われた。しかし、その反面、4市町村にまたがり、秋葉街道沿いに南北に長く位置するジオパークには、いくつか課題が浮き彫りになっている。その一つとして、飯田ジオパーク、伊那ジオパーク、大鹿ジオパーク、富士見ジオパークの4つのジオパークがあるように感じる点である。4つのジオパークの集合という印象になっている理由は、基本計画が不十分であり、基本計画をベースとした事業計画まで展開されていないことにある。このことが、各専門部会の活動がジオパークエリア全体に広がっていない。この点については、例えば、協議会全体で再度将来的な基本計画を立案し、各部会はその基本計画に沿った事業計画を出し、それを事務局を中心に調整整理し、一年毎に実行し、その結果を評価改善し、次の一年の計画を立てるというやり方をしてほしい。また、今回の再認定審査の中では、登山者だけの南アルプスではなく、ジオを学ぶ上での南アルプスとしての側面を強く感じた。中央構造線エリアを大きなテーマとしているが、南アルプスも大きなテーマになる印象を受けた。この点も今後再検討してほしい。

このジオパークには、地域の人たちが独自に整備し、来訪者にジオサイトを伝えようとしている姿がある。そしてその人たちは、各地域におり、さらに多くの人に地域の良さを伝えたい、防災の意識を伝えたいという熱い思いを持っていることを感じた。これはジオパークのベースであるし、この人たちとともに進める活動にするためにも各自治体別々のジオパークではなく、一体活動を目指してもらいたい。

以上の審査から課題はあるものの、ジオパーク活動に進展が認められたことから、南アルプスジオパークを日本ジオパークとして再認定することが妥当と判断した。